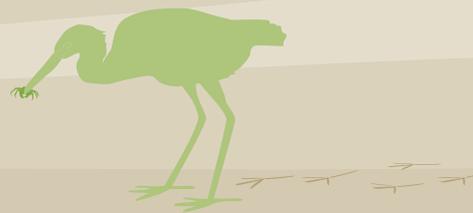


なぎさ NEWS



博物館など7施設が連携したトビハゼ調査スタート

日本の分布域の北限にあたる東京湾のトビハゼは、かつての大規模な埋め立てなどにより生息地が減少し、数が激減しました。しかし、近年は人工干潟の造成などにより、少数ながら新しい生息地も確認されています。東京湾のトビハゼの現状を明らかにすることは、保全のために重要なことです。水族園では2003年からトビハゼ調査を行ってきましたが、一つの施設では時間と労力が限られるため葛西海浜公園「東なぎさ」など近隣の干潟しか調査できませんでした。しかし2013年、このトビハゼ調査が大きく進展しました。東京湾奥部にある博物館などの7施設が連携し「トビハゼ保全施設連絡会」が発足したのです。夏の巣穴数カウント、秋に上陸した子どもの数の確認という調査を、各施設それぞれが近隣干潟でいっせいはじめたのです。これを最低10年間行う予定ですが、調査により東京湾のトビハゼの現状が分かり、今後の保全方策を検討するうえでの重要な基礎資料となることを願っています。(飼育展示係 田辺 信吾)



アシに吸盤のようになった腹ビレでのぼるトビハゼ

「西なぎさ」での干潟プログラムの再開



昨年の夏に行った小学校の先生向けの観察会

水族園にもっとも近い海辺、それは目の前の東京湾に広がる「西なぎさ」と「東なぎさ」です。水族園は開園以来、「西なぎさ」で生き物の調査を行うとともに、一般の方や学校団体向けに観察会などの教育普及プログラムを実施してきました。しかし、2011年の3.11震災以降、江戸川・荒川河口域の放射能汚染が懸念されたことから、一部の調査は継続してきましたが、観察会などの実施を控えてきました。その後、2013年5月に東京海洋大学にお願いした調査により放射能の影響は問題ないことがわかり、2013年8月から活動を再開しました。

動物園や水族館は自然への窓口と言われます。水族園で生き物や自然のすばらしさ、おもしろさを感じてもらえたら、是非、身近な自然で実際に生き物とふれあって欲しいと考えています。人工ではありますが、私たちの足元の自然であり、東京湾にある貴重な干潟である「西なぎさ」をみなさんに知ってもらうことは、水族園の重要な活動の一つといえるでしょう。今後もさまざまなプログラムを行っていききたいと思います。

(教育普及係 天野 未知)

なぎさ 生き物ミニ情報

水族園は「西なぎさ」と「東なぎさ」で、さまざまな生き物調査を行っています。今回は、11月と12月に行った地曳網調査の結果と冬に渡って来たスズガモについてお伝えします。

●地曳網調査の結果

11月：水温は18℃、サツパやマルタがおもな採集生物でした。全長1cmちょっとのアユの稚魚もとれています。過去の調査では例がありませんが、波打ち際でマナマコが見つかりました。

12月：水温は15℃でした。生物はめっきり少なくなり、ヒメハゼやアシシロハゼなどが少数採集されました。アユの稚魚は全長3cmほどになりました。

●こんな生き物を観察してみよう「スズガモがやってきた」

1月から3月頃まで、「西なぎさ」から東京湾を見ると鳥の大群が眼に入ります。それらのほとんどはスズガモというカモの仲間です。彼らはユーラシア大陸で繁殖し、寒さが厳しくなると日本へ渡り越冬します。おもなエサはアサリなど二枚貝で、殻ごと丸呑みにします。ところで、葛西周辺にはどれくらいのスズガモがやってくるのでしょうか？ 昨年はなんと2万羽以上がやってきたようです。大雑把な計算をすると、2万羽のスズガモが冬の間に食べる貝類の重さは、約3000t。それほど多くの貝が生息しているということなのです。(飼育展示係 古橋 保志)